

## 「公的な歴史認識」の基準をめぐって：ドイツ歴史家論争

著者	柴田 育子
雑誌名	倫理学
号	14
ページ	75-95
発行年	1997-12-20
その他のタイトル	Streit um Maßstäbe des öffentlichen Geschichtsbewusstseins "Historikerstreit" in Deutschland
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14994">http://hdl.handle.net/2241/14994</a>

## 「公的な歴史認識」の基準をめぐる――ドイツ歴史家論争――

柴田育子

### 一 解釈される「歴史」

一九八六年にはじまったドイツ歴史家論争<sup>①</sup>は、「戦後ドイツの公的な歴史認識の擁護者ハーバーマス対歴史修正主義者の対決」という様相を呈した。戦後ドイツの代表的な歴史論争の一つとなったこの論争によって、「歴史」の理解をめぐる苦悩するドイツの姿が改めて浮き彫りにされた。この論争は、史実を解釈する必要性が生じた時に、それをどのような意図あるいは理解において解釈すべきなのかということについての一事例を、われわれに示してくれた。歴史はつねに解釈されるものである。その解釈において、われわれはどのような基準を持つべきなのであるか？

ドイツ歴史家論争における「歴史」とは、ナチスの歴史を指している。一九三三年から四五にかけてのこのドイツにとつての「負の歴史」をどのように理解するかという問題は、時間の経過と共に、つまりそれが歴史化すればするほど、ドイツに

とつて難しい問題となっているようである。

ナチスに対する戦後ドイツの公的な歴史認識は、周知のように、無条件の反省である。「ナチス犯罪を含む殺人罪の事項撤廃」という西ドイツ刑法（一九七九年）<sup>②</sup>や、日本で教科書問題が論議される度に比較される歴史教育の授業でのナチズムの取り扱いはそれを示している<sup>③</sup>。終戦の一九四五年は、ドイツでは「零時」（die Stunde Null）と呼ばれる。「零時」は、ナチス政権時代とその土壌を提供した国民史の「反省」に基づいて、新たに零から国家再建に着手した時間を指す。従って、この歴史認識は、ドイツの一九四五年までの国民史の否認をも意味することになる。ナチス政権を生み出した国民史は反省されるべきものであり、戦後ドイツでは、国民史を持ち出すことは容易には許されないことになったのである。国民史を持ち出すかぎり、ナチス時代は避けて通れず、国民史を評価することはナチスを評価することに結びつくからである。これが戦後ドイツにおける公的な歴史認識であった。敗戦後四十年にあたる一九八五年五月八日、ドイツ連邦議会でヴァイツェッカー大統領（当

時)がおこなった過去の反省を促す有名な演説は、ドイツのこうした歴史認識を余すところ無く伝えているものといえよう。

歴史家論争において、ナチスがドイツの「負の歴史」であることに異論が唱えられたわけではなかった。ここで問題となったのは、これまでの国民史に対する全面的反省という歴史認識のあり方は、ドイツにとっては歴史の断絶となり、ドイツ国民の国家に対する誇りや自信を喪失させるのではないかということであり、このことについて論争が行なわれたのであった。この点において、ドイツ史の中でナチズムが占めている位置の問題が改めて論議されたのであった。

## 二 各論者の見解

まず歴史家論争に参加した、両陣営の主な論者の見解を簡単に振り返ってみることにする<sup>(4)</sup>。

### (a) ユルゲン・ハーバーマスの見解

ハーバーマスは、一九八六年七月一日付の『ツァイト』紙に発表した「一種の損害補償」(Eine Art Schadenabwicklung)と題する論文によって、ドイツ歴史家論争の火付け役となった。

この論文でハーバーマスは、彼が歴史修正主義者と呼ぶノルテ、シュテュルマー、ヒルゲルバー、フェストらの歴史学者たちの「歴史」認識を、個々に実名を挙げて批判した。「一種の損害補償」という表現が意味するものは、歴史的経過の中で不

可避的に被った損害は、国民共通のアイデンティティによって補償されなければならない、という(ハーバーマスから見れば)誤った見解である。そしてこの「損害補償」をナチズム以後のドイツ現代史に要求しているのが、ノルテ、シュテュルマーら歴史修正主義者たちであり、彼らの姿勢は、「現代史記述の弁護論的傾向」を持つているというのである。歴史修正主義者たちは、とりわけシュテュルマーがそれを主張しているのだが、国民共通のアイデンティティ無しには国家の安定は維持できないとする。しかし、「国民共通」という語を全く重要視せず、戦後西ドイツが獲得した西欧型デモクラシーこそを、ドイツ人にとってのみならずある普遍的なものとして重要視するハーバーマスは、「ポスト国民的アイデンティティ」を主張してこれに対抗したのである。

社会哲学者としてのハーバーマスの拔群の知名度、またその言動に対する社会的な注目度から見ても、ハーバーマスの参加があればこそ、ドイツ歴史家論争はここまで大きくなり得たとも言える。そしてこの論争は、議論の内容を見れば分かるように、紛れもなくハーバーマス中心の論争であった。ハーバーマスが批判し、その批判に対してハーバーマスが再批判されるという形でこの論争は進んでいったのである。この論争でハーバーマスは、戦後ドイツもそれを範としている、西欧に起源を持つ啓蒙主義的立憲国家に対する絶対的な信頼とナチズムの犯罪(特にユダヤ人の最終解決の問題)に対する無条件の反省を一貫して主張した。彼の次のような文章は、歴史家論争におい

て、両陣営が何を主張したかを伝えている。

確かに論争のいずれの陣営も連邦共和国の西欧志向については断固これを支持している。だが一方がむしろ西側の結束というパワー・ポリティックスの上の構想に導かれて、軍事同盟と外交政策を第一に考えるのに対し、他方は西欧の啓蒙主義文化との絆に力点を置く。<sup>(5)</sup> (強調引用者)

一方の陣営は、距離を置いて理解するという作業は、反省的な想起の力を解放し、そのことによって、両義的な意味をもつ伝統と自律的に関わる余地を拡大する、という前提から出発する。それに対して、他方の陣営は、伝統的なアイデンティティを国民の歴史を軸にして修復するという目的に、修正主義的な歴史記述を奉仕させようとする。(HS23: 邦訳六五) (強調引用者)

引用文中、強調した箇所はハーバーマスの見解である。この文章には、ハーバーマスの「啓蒙主義文化」に対する全面的な信頼、それに対してドイツ的な伝統は、何があっても「距離を置いて」理解しなければならないという考えが語られている。なぜハーバーマスがこのようにドイツの国民史に対して否定的な態度をとるのかといえば、それは「アウシュヴィッツのホームの光景。ドイツ人の国民史に深く焼き込まれた道德的な未完の過去」(HS243: 邦訳一九六)の故にである。アウシュビッツ

があるが故に、ドイツ人は、「犯罪者の相続人、あるいはただじっとしていた者の相続人」<sup>(6)</sup>として、国民史に連続性を付与することを許されないというのである。

この意味で、ハーバーマスはヤスパースがかつて述べたような「集団的共通責任」を認める。彼は語る。

後から生まれた者であっても、あのことが可能となった生活形式のうちで生い育っているという単純な事実には依然として存在している。アウシュヴィッツが可能となった生活のあり方と我々自身の生活が結びついているのは、偶然ゆえではない。

(中略) 要するに、歴史的環境によってつながっており、それによってこそ我々は、自分たちが今日あるところの存在となっているのである。この歴史的環境の外に自分だけ忍び出ることには誰にもできない。なぜなら、まさに我々自身のアイデンティティは、つまり個人としてのアイデンティティもドイツ人としてのそれ、この環境に負っているからである。(中略) 我々はおもひも自分自身を否定したいのではありません、自分たちの伝統を認めなければならぬ。(HS247: 邦訳二〇〇)

ハーバーマスは「国民国家」という概念自体が、今日既に意味をなさないとする。「カントがドイツ精神史の一部であることと同じように、文化的アイデンティティの共通性は、社会構成や国家形態との結合から分離している」<sup>(7)</sup>。こうした認識は政治の面においても言えるのであり、それをハーバーマスは「ポ

スト国民(伝統)的なアイデンティティ」と呼ぶ。彼にとって  
は民主的立憲国家が持つ民主主義と人権は普遍的な実質を持つ  
ものなのであり、国民性にはとられないものである。そういう  
事情に至ったのは、「歴史」の故にであり、その「歴史」の故  
にそういうことを言うのは許されなくなったわけである。「つ  
まり、アウシュヴィッツ以降、我々がナショナルな自己意識を  
汲み出しうるのは、我々の良き伝統、それも鵜呑みにせずに批  
判的に獲得した歴史の中のものより良き伝統からのみである」  
(H248: 邦訳101)と。

引用文中の「伝統」という単語の使い方にもハーバーマスの  
見解がよくあらわれている。彼は、ドイツの「伝統」を徹頭徹  
尾、批判的な意味で受けとめる。一九四五年以降の伝統は良き  
伝統であるが、一九四五年以前の「伝統」は批判的な伝統であ  
る。この分かれ目は、先に述べたようにドイツがデモクラッ  
ティックな立憲国家であったかどうかである。一九四五年以降の  
伝統は西欧の文化から受け取った啓蒙主義という伝統であり、  
これは、「憲法パトリオティズム」(Verfassungspatriotismus)と  
いうことばで評価される。憲法を普遍的な実体と見なすハー  
バーマスにとって、この言葉はこの論争におけるキーワードで  
あり、それ故、この言葉を論争の中で何度も用いるのである。

ハーバーマスは「憲法パトリオティズム」を、「国民的アイデ  
ンティティとは反対に、部分的に重なりあい、もはや一つの中心  
点」など必要としない複数の集合的アイデンティティ<sup>3)</sup>、  
「民主主義と人権を一般原則にするという抽象的理念が強固な

実質を生み出している」ものと定義する。そして「西側からド  
イツを離反させない唯一のパトリオティズム」(H25: 邦訳六  
八)、すなわち「普遍主義的な憲法原理への信念に基づく忠誠  
は、ドイツ人の文化国家の中では、残念ながらアウシュ  
ヴィッツの後になって、アウシュヴィッツを通じて、初めて形成  
されたもの」(H25: 邦訳六八)と述べるのである。

この論争でハーバーマスが問題としたのは、ナチズムの位置  
づけをめぐるドイツ連邦共和国の公的な歴史認識であり、彼は  
「戦後ドイツの公的な歴史認識の擁護者」として、この考えを  
覆そうとする修正主義者(とハーバーマスは呼んだ)の見解を  
批判したのであった。

#### (b) エルンスト・ノルテの見解

歴史家論争の直接のきっかけを作ったのは、『フランクフル  
ター・アルゲマイネ』紙(一九八六年六月六日付)に掲載され  
たノルテの論文である。論文のタイトルは「過ぎ去ろうとしな  
い過去―書かれはしたが行なわれ得なかった演説―」である。  
ノルテ自身も指摘していることだが、この論文は、既に一九八  
〇年七月二〇日付けの同紙に掲載された彼の論文「歴史伝説と  
修正主義のはざま?」と同質のテーマを取り扱っている  
(H228: 邦訳一七七)。こちらの論文は一九八六年にはじまる  
歴史家論争の最中に発表されたものではないが、この中でも歴  
史家論争と内容的には同じであるノルテの見解が明確にあらわ  
れているので、これも合わせてノルテの見解を見ていこう<sup>4)</sup>。

ノルテが「過ぎ去ろうとしない過去」という表題に込めた意味は、ドイツ人のナチスの過去のことである。「普通であればいかなる過去も過ぎ去っていくものであるのに、過ぎ去らないのは何かまったく例外的なことであるに違いない」(HS36.邦訳三九)と彼はいう。次のような文章は彼とハーバーマスとの違いを決定的に表している。

ドイツ連邦共和国の状況は過ぎ去ろうとしない過去によって特徴づけられており、その結果として、これまで十分に自覚されていない、質的に新しい状況が生じている。すなわち、ナチスの過去は絶対的悪という否定的神話となり、重要な修正が妨害され、結果として学問を無視するような状況である。同時にまたこの状況は、〈絶対的悪〉なるものに対して決然として闘う者が一番正しいことになる、という政治的結果を含みとして生むことになる(強調引用者、HS27.邦訳一七六)。

ノルテは、「第三帝国の状況が、徹頭徹尾否定的な状況であること」(HS15.邦訳一二)を危惧する。これは学問的な見地からの危惧であると彼はいう。このような状況は、「歴史的現象の否定的な状況は、学問にとってある大きな、それどころか生命に関わる危険を意味する、ということは否定できない。つまり否定的であれ肯定的であれ、永続的な状況というものは、必然的に、伝説の強められた形式として神話の性格を持つ。このような神話が国家を基礎づけ支えるイデオロギーとなる」

(HS17.邦訳一三)と。

ハーバーマスはこうしたノルテの立場を「修正主義」という語で批判したが、上記の引用文でも明らかなように、ノルテは「修正」を歴史学にとって重要なものと見なしている。ノルテは先述の一九八〇年の論文で既に「修正」の必要性を強調している。

修正とは、狭い意味での修正主義、つまり公示されているか否かを問わず、ある意図によって導かれた連続的な意味づけの修正、であってはならない。歴史の伝説化でも修正主義でもないが、変化した歴史状況から出発した修正、それは私の見る所、第三帝国に関して、一九八〇年の時点の視野からある学問を要請することである。その学問<sup>(9)</sup>は時代への束縛から自らを解放しようと努め、そしてそのかぎり単なる個別科学や特殊科学より以上のものでなければならぬだろう。(強調引用者、HS34.35.邦訳三三)

ノルテは、学問<sup>(9)</sup>にとつては「修正」そのものが基礎の意味を持つ(HS1.邦訳一四)と考える。そして「修正」を、「有力な根本的仮定に対する不断に新しく加えられる批判である」と定義する。彼は問う、「第三帝国の歴史もまた、今日、終戦後三五年のこの時点で、修正を必要とするのではないか？」(HS17.邦訳一五)と。そして、「私には、第三帝国を一九八〇年の状況から、ある新しい修正された叙述へともたらずべきだとすれ

ば、これこそまったく緊急かつ困難な課題だと思われる」(H25 邦訳二二)と語る。

ここからだけでもハーバーマスとの違いはあまりにも明らかであるが、ハーバーマスをドイツ歴史家論争の火付け役とならしめたのは、加えてノルテのナチズムの比較可能性の見解に對してであった。ハーバーマスはノルテの以下の文章を先述の「一種の損害補償」の冒頭で引用しているほどである。この比較可能性の可否の問題は歴史家論争において最も大きな争点の一つとなった。ノルテは以下のように語っている。

ナチズムを扱ってきた文献の顕著な欠陥は、ナチスが後に犯すことになるすべてのことがらは(中略)ガス室での抹殺という技術的なプロセスを唯一の例外として、すでに一九二〇年代初頭の多くの文献に相当量書き残されているという事実を、知らないか、あるいは認めようとしない点にある。ナチスが、そして「ヒトラー」が「アジア的」蛮行に及んだのは、もしかするとひとえに、自分たちや自分たちの同胞を、「アジア的」蛮行の潜在的もしくは現実的な犠牲者と見なしていたからではないか。「収容所群島」の方がアウシュビッツよりもいっそう原始的であったのではないか。(強調引用者、H25 邦訳四七)

ノルテは、ナチズムが話題になる際に、ユダヤ人の「最終解決」にばかり目が向けられていることに疑問を呈する。その結果として、「ナチ時代の重要な諸事実はなおざりにされている」

(H25 邦訳四二)と考える。そして反ユダヤ主義はドイツ人にだけに蔓延したものではないことも主張する。この点が、ユダヤ人の最終解決(アウシュビッツを含む)の問題をドイツ人の共通責任として、最重要視するハーバーマスから批判されることになったのである。

#### (c) ミヒャエル・シュテュルマーの見解

シュテュルマーは歴史学者であると同時に、コール政権のブレインの一人として政策立案にも関わっている人物である。したがって、コール政権の歴史政策であるベルリン歴史博物館とボン・ドイツ連邦歴史博物館の両博物館構想にも関与していた(後述)。この点、両博物館構想に反対の立場をとるハーバーマスとはドイツ歴史家論争以前から見解を異にしていた。彼とハーバーマスの対立は、政策がらみの政治色を含んでいたものでもあった。

ハーバーマスはシュテュルマーの見解を「ドイツ・ナショナリズムの色を染め込まれたNATO哲学」(H25 邦訳六八)とこき下ろし、彼を「御用学者」として断罪したわけであるが、ハーバーマスと彼との見解の違いは、「歴史」の認識の問題をめぐって、まず存在した。ハーバーマスは、先にも述べたように、ナチスの「伝統」をドイツ人にとって一貫して否定的な伝統としてとらえ、ドイツ史に對する全面的で無条件の反省を要求する。ハーバーマスはドイツ史を一九四五年の段階で断絶したものと見て見る。しかしシュテュルマーは、「記憶の無い国に

においてはなにが起るか分からない」(H336 邦訳三五)、「失われた歴史を求めることは、抽象的な教養のおつとめなどではない。それは道徳的に正当で、政治的に必要な課題である」(H336 邦訳三八)と語り、ドイツ史の連続性を主張する。

シュテュルマーによれば、ドイツは規範となるべき歴史を一九四五年に失ったのであり、この失われた歴史を再認識する必要があると考える。シュテュルマーは、「歴史」に確固たる価値基準を要求する。それは、確固たる国民的アイデンティティを持った民族のみがNATOにあさわしく信用される国であると考えからである。アイデンティティとはそれなくしては生きられないものであり、ドイツ人がドイツ人としてのアイデンティティを求めることは、彼にして見れば必然なのである。したがって、ドイツ史を回顧できる場である歴史博物館をつくることは、アイデンティティの確立のために必要なことであると考える。しかしハーバーマスは、とりわけナチズムの時代において、日常生活における表面的な正常性と犯罪性との共存と錯綜という状況を思い起こせば、ドイツに歴史博物館をつくって単純に過去の父祖の生活を道德化することなど許されないと考える<sup>(12)</sup>。ハーバーマスから見れば、過去のドイツ史はあくまで一九四五年に断絶したものである。

ハーバーマスの「NATO哲学」という批判に対して、シュテュルマーは強く反論する。彼は、NATOの一部としてのドイツのみがドイツにとって唯一の道であると考え、NATOは既に超国家的な性質を有する厳然たる事実なのであり、こ

の事実から誰も距離を取ることは出来ないとする。そして「NATO哲学」という批判は、この論争における争点の一つでもある「ネオ・ナショナリズムという批判とどう折り合いが付くのか」(H391 邦訳二八)と問うている。確かに、ドイツがNATOに帰属するかどうかというのはこの論争における大きな争点ではない。「NATO哲学」、「NATOの歴史家」というハーバーマスの批判は、NATO体制支持者シュテュルマーに冠した枕詞のようなものであり、NATOそのものに関する賛否がこの論争でなされたわけではないからである。この点、「NATO哲学」という批判とシュテュルマー批判が直接結びついているわけではない。しかし、ハーバーマスの「NATO哲学」という批判が正鵠を得ていないとしても、シュテュルマーもまた、ハーバーマスに対して、ハーバーマスがドイツ社会民主党寄りの考えを持ち、連邦選挙(一九八六年)を意識して反ファシスト・アジテーションを狙って論争を仕掛けているという批判をしているのである(H391 邦訳二八)。このことに対して論争においてハーバーマスは何も発言していない。ここに至って論議は、本質をはずれ完全に袋小路に入ってしまった。この非難の応酬に対しては、この論争が政治色をかなり帯びていたものであったことを考えるだけにとどめ、論争そのものからは割り引いて考える必要がある(後述)。

このように国民的アイデンティティの確立を主張するシュテュルマーは、『落ち着かぬ帝国、ドイツ一九六六—一九一八』<sup>(13)</sup>の中で、「ドイツ中欧特異論」を展開している。これは内容的に、論



争時の彼の主張と同様である。すなわちドイツはヨーロッパの中心という微妙な位置に存在していたため、それがドイツ史に影響を及ぼし、ビスマルク的な権威主義によつて国家をまとめざるを得なかったものであり、西欧諸国とは異なつた歴史の展開をすることになった、という論である。彼のこうした「ドイツ中欧特異論」もドイツ歴史家論争において、ハーバーマスから痛烈に批判された。ハーバーマスは「中欧」<sup>(4)</sup>という概念そのものを認めず、これを「地政学の太鼓」(das geopolitische Taktum, HS75, 邦訳六八)と批判した。そして、そうした考えは、ドイツ人を国民的アイデンティティの伝統的な形態へと連れ戻そうとする策略に過ぎないとした。「ドイツ中欧特異論」をめぐる両陣営の対立については後でもう少し詳しく見ることにする。

#### (d) ヨアヒム・フェストの見解

フェストは、論争時に『フランクフルター・アルゲマイネ』紙の共同発行人(Mitherausgeber)の一人として、ジャーナリズムの立場からこの論争に関わつた。しかし彼は、ヒトラーと第三帝国を専門とする歴史家でもある<sup>(5)</sup>。新聞・雑誌がこの論争の活発な論議の応酬の場となつたことも、この論争の特徴であつた。フェストと考え方の近い、ノルテやシュテュルマーの論文が、『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に掲載されたのは故無きことではないであろう。また、「新聞紙上で」と言つても、発言の場となつた新聞は一つや二つではなかつた。ハー

バーマスが発言の場としたのはハンブルク発行の『ツァイト』紙であつたし、ノルテ側は既に述べたように『フランクフルター・アルゲマイネ』紙であつた。この両紙はドイツを代表する新聞として、一方はリベラル一方は保守であることもよく知られている通りである。その他にも、大小の新聞・雑誌が論争において発言の場となつた。また、こうした一般紙(誌)を論争の舞台としたことは、一般読者にも論争に対する関心と呼びおこし投書による発言等を促すことになつたし、広く海外にも論争が知られることにもつながつた。

さて、保守系新聞の共同編集人であるフェストは、この論争においてノルテやヒルグルバーの主張を支持した。ヒルグルバーの著書に関しては、「彼はその著作のタイトルで、第三帝国の〈粉碎〉を一方で語りながら、他方でヨーロッパ・ユダヤ人社会の〈終焉〉を語つた」(HS103, 邦訳九四)と評価している。フェストの論文「負債としての記憶—ナチズムの集団犯罪の比較可能性に関する論争によせて—」(『フランクフルター・アルゲマイネ』紙一九八六年八月二九日号)は、ナチズムの比較可能性の問題を取り上げ、その比較可能性を肯定したものである。フェストは、ドイツ歴史家論争において最も重要な争点は、ナチ犯罪の唯一性というテーゼであり、ハーバーマスのいうようなナチスに対する道徳的評価の問題ではないとする。この点、ハーバーマスが争点としたものとは大きく異なり、フェストはハーバーマスの見解を、論議の本質を見失わせようとする「凡庸きわまりない陰謀説」(HS110, 邦訳一〇三)

と決めつける。そして、フェストは、ナチズムはソ連のボルシェヴィズムと決定的性格の点で比較可能であると考ええる。両者とも、行政的に計画され、技術的手段を伴って集団的で機械的な殺害行為である点からして、比較可能であるとするのである。

しかしこうした主張する一方で、フェストの意識は、公共の歴史認識の方向にも向いている。少なくともこれについても論じている。そして、ナチスが今日、公共の議論においては認識よりはむしろ悪魔払いをめざしていることに彼は懸念を表明する。この点はノルテと同様である。罪そのものは他の同様の罪との比較によって相殺され得ないのは当然としても、それをナチズムの犯罪に結びつけて道徳性が失われていると唱えるのは、学問の発展を妨げ、論議の本質を見失わせてしまうのではないか、というのである。フェストによればこの道徳的意識の担い手がハーバーマスに他ならないのであり、彼によってノルテ陣営の歴史学者たちが主張していることの本质が故意に見失われたと批判するのである。

また先のシュテュルマー同様、ビーバー社から論文集が出版された際のとがきでフェストもハーバーマスの政治的意図に言及している。ハーバーマス陣営<sup>(16)</sup>が連邦議会選挙のためのアジテーションとして、このドイツ歴史家論争を利用したというあの批判である。それは党派的傾向であるとされ、それに対してノルテやヒルグラーバーらは学問的努力を代表する人物であり、利害関係にとらわれることなく努力している歴史家である

と彼は評価している<sup>(17)</sup>。

#### (e) アンドレアス・ヒルグラーバーの見解

ヒルグラーバーは、第三帝国に関する著書を数多く持つ歴史家であったが<sup>(18)</sup>、このドイツ歴史家論争においてハーバーマスから痛烈に批判された一人であった。ハーバーマスの批判は、ヒルグラーバーの著書『二つの没落―ドイツ帝国の崩壊とヨーロッパのユダヤ主義の終わり』<sup>(19)</sup>の内容に対して向けられた。この書でヒルグラーバーは、一九四四年から四五年にかけての東部戦線の壊滅を、ドイツ軍の英雄的行為、すなわちドイツ市民のため犠牲となって西側への退路を開くためにソ連軍と戦った、という観点から記述した。その記述の中でドイツ軍がロシア軍の残虐行為からドイツ市民を保護したことも指摘した。これがハーバーマスから「物語的な叙述の仕方を好み、社会科学的な説明の試みは全く評価しない歴史家」(Hörsing, 邦訳五七)と批判されたのである。ハーバーマスの批判は、ヒルグラーバーが戦争における破壊者がドイツ軍ではなくソ連軍であるかのように物事をすり替えているというものであり、またこの書物で第一部を東部戦線の崩壊の記述とし、第二部をユダヤ人問題と分けて論じていることに對しても、ユダヤ人問題を軽視したとして批判した。

そしてヒルグラーバー自身は、ハーバーマスの批判に反論するという形で、期せずしてこの論争に参加することになった。予想外の形で論争に巻き込まれたという意識のためか、彼の反

論には、しばしばハーバーマスに対する感情的な攻撃が見られる。また自ら積極的に論争に参加した訳でもないのに、発言もそれほど多くない。ヒルグルバーの反論は、ハーバーマスの引用に対して方法上の誤りを指摘したり、ハーバーマスが歴史家としてのヒルグルバーを批判できるほど戦争史や軍事史を研究しているのか、といった程度にとどまり、論争の本質に及ぶ発言には至っていないように思える。

ヒルグルバーの反論は、歴史学という学問の場を離れて、論争の問題が取り上げられていることに懸念を表明することに主眼がおかれていた。彼はハーバーマスがこの論争を学問的な根拠によらず政治的な動機によって (HS33: 邦訳一八二) 仕掛けたとし、そのために、歴史学、政治、ジャーナリズムの諸問題が混同させられてしまっていると言う。そして歴史においては、「いかなる事件、いかなる動き、いかなる人物も比較可能でなければならぬ」 (HS33: 邦訳一八六) と主張する。この点に関しては、ノルテらの見解と同じである。しかし一方で、修正主義者という表現によって、ノルテ、シュティルマーらと彼を同列に論じているハーバーマスの言い方を強く拒絶する。彼は「修正」という単語が、誤った概念になってしまったことを指摘している。「これまでの研究成果の『修正』というのは、どんな学問においても普通のことであるし、それどころか学問の規範であるはずのものである」 (HS33: 邦訳一八三) と。そしてナチスのイメージも一九六〇年代半ば以降、歴史学の展開に伴って、構造分析とか日常史と言った研究によってとつくに

「修正」が行われているものののに、この数十年の現代史研究の進展をフォロワーしていないハーバーマスは、それを知らずナチスに関する月並みなイメージしか知らないと批判するのである (HS33: 邦訳一八四)。ヒルグルバーはハーバーマスの解釈を、単純化され、あるいは政治化された歴史解釈であるとして批判した。

ヒルグルバーは、ハーバーマスは政治的な動機から故意にこの論争を仕掛けたと批判した (HS33: 邦訳一八二)。歴史博物館の問題にしても、彼自身の書物はあくまで一九四四年から四五年にかけての東部戦線の崩壊を扱っているものであり、歴史博物館計画の議論に巻き込まれるのは心外であると言う<sup>(20)</sup>。また、「中欧」という概念に関しては、今日、戦前のドイツを盟主とする「中部ヨーロッパ」の概念自体は意味をなさないが、西ドイツ(ドイツ連邦共和国)と東ドイツ、あるいは西ドイツとチェコスロバキア(当時)、ポーランドとの緊密な諸関係を新たに構築すると言う意味では意義のある概念だとして、シュティルマーの「中欧論」を補足している (HS38: 239: 邦訳一九〇)。

#### (f) ユルゲン・コッカの見解

コッカは、歴史家論争においてハーバーマスに近い立場で発言した一人であったが、論争の中心的人物というわけではなかった。それはこの論争が終始「ハーバーマス対歴史修正主義者」という様相を呈していたからである。しかしコッカは、実

質的な論争終了後もそこで取り扱われた問題を重要視し、著書も出版している<sup>(21)</sup>。また著名な歴史学者である彼の発言は、この論争において「歴史学の専門家でもないくせに」という批判を浴び続けたハーバーマスの発言を、補う意味を持っていたといえる。事実、コッカはナチスの構造解釈についての議論の下地は既に歴史家たちの間にあったことを述べている。

コッカは歴史学者としてはビーレフェルト学派に属する。周知のように、ビーレフェルト学派はマックス・ウェーバーの社会学の影響を受けた学派で、社会史を重要視し、民主主義の立場からドイツ史を再認識しようとする。彼らは、ナチズムとホロコーストの問題をドイツ史における民主化の挫折という側面から描き出していった<sup>(22)</sup>。ビーレフェルト学派は、学派としての性格上批判的なモチーフを持つので、政治的には保守的ではない。この点、批判的知識人としてのハーバーマスにより近いとも言えよう。

コッカは、歴史家論争において争点の一つとなった歴史学における比較可能性の問題については、これを否定しない。この点においては、ノルテらと異なる立場に立つわけではない。しかしコッカは、比較は類似点だけではなく相違点を重視することにおいて比較されねばならないことを主張する。そしてその点においてナチズムとスターリニズムの大量殺戮は決定的に違っていることを示唆する。ナチスの殺戮は官僚的で体系的なものであったのに対し、スターリニズムのそれは権力闘争的なもので発展途上型独裁の残酷さにすぎなかったというのがその

理由である。そしてコッカはまた、「比較は、ふだんわれわれが伝統的に比較するのを好んできた西側のさまざまな社会を相手になされるのが望ましい」といい、こうした比較において「ドイツの独自性というものが、スターリンやポル・ポトとの比較によって抑圧・排除されてはならぬ」(HS135: 邦訳一九)と述べる。

また彼は、シュテイルマーの主張する「ドイツ中欧特異論」にも反論する。「地理的位置そのものはほとんど何の説明にもならない。スイスもポーランドもへ中央へに位置している。だからこれらの国は全く異なった歴史をもっている。……どこが中央かということすら、それ自体歴史的な現象なのであって、時代とともに変化する。例えばウィーン会議においては、敗北し危険視されていたフランスが、一方をイギリス、一方を新たに成立したドイツ連邦とロシア帝国に挟まれた中央国家であった」(HS141: 邦訳一九)と。

コッカは、一九八八年に発表した論文の中で、歴史家論争では、ドイツの歴史の中でナチズムが占めている位置の問題と、ドイツ連邦共和国がみずからをどのように理解しているかが中心的な問題であったと述べている<sup>(23)</sup>。そしてこの論争には、歴史学の専門的な知識を有していることが正式参加のための必須の条件というわけではなく、ましてやナチズムの専門家であることもこの論争に参加するための条件とは何らなかったことも言う。こうしたコッカの姿勢は、歴史学固有の分野に固執しようとしたヒルグラーバーとは明らかに異なっているし、

広く戦後ドイツ全体の問題としてこの問題を取りあげていこうとする姿勢が見られる。この点は、ビーレフェルト学派の一員として彼のスタンスとも言えるであろう。フェストにとつては「歴史的な議論の根本的な態度決定においては、学問と政治と道徳はつねに結びつくものである」(HJG35, 邦訳二一〇)。この点において、彼はハーバーマスと同様の視点を持つのである。

### 三 ドイツ歴史家論争の諸側面

#### (a) 政治論争としての側面

ドイツ歴史家論争はまぎれもなく政治的な論争でもあった。ヒルグラーバーのように、政治的なものに関わることを極端なまでに避けようとする者もいたが、ハーバーマスやシュトゥルマーは政治の関与を当然のこととして受け止め、政治を十分に意識して論争をおこなった。ノルテにも同様のことが言える。

この論争には一九八〇年代の「進歩派」対「保守派」の政治的対立が含まれていたのである。ドイツでは、一九八〇年に一三年ぶりの保守政権が誕生してから、「歴史」をめぐる周囲の状況は明確に変化しつつあった。そして、こと「歴史」に関しては、「進歩派」は戦後ドイツの公的歴史認識を「保守」しようとし、「保守派」はその歴史認識を、「進歩」させて変革しようとするという不思議な状況が生まれていた。政治的状况とは以下のような事例を含んでいる。

#### ① ベルリン歴史博物館とポンのドイツ連邦共和国歴史館二つ

の歴史博物館の創設準備作業問題。

これはコール保守政権の「歴史政策」の一環であった。東ドイツは、既に東ベルリンにドイツ史博物館を有し、マルク・レーニン主義に基づいた視点から、すなわちドイツの歴史と伝統から離れてドイツ史を見ろという公式の歴史像を持っていた。これに対抗して、コール保守政権は、西ドイツにも公式の歴史像を作ることを目指したのである。それによって西ドイツ国民の国民的アイデンティティの確立をねらったのである。この設立委員会のメンバーにはシュテュルマーも含まれているし、シュテュルマーのドイツ歴史家論争における発言はコール政権の歴史政策における見解と当然のことながら一致する。ハーバーマスはこれに反発して、「ポスト国民的アイデンティティ」を確立することを訴えた。

#### ② ビットブルク墓地訪問問題

コール政権が歴史政策を推し薦め西ドイツ国民のアイデンティティを確立しようとした背景には、ナチスという忌まわしい過去にいつまでもとらわれたくないという意図があった。ビットブルク墓地訪問問題に対するコール政権の対応を見るかぎりそういえるであろう。この点が、この忌まわしい過去をどこまでも直視し続けることを主張するハーバーマスの反感を買った点であるし、こうしたこの保守政治家の姿勢はそのまま保守的な歴史学者の見解と結びついている。イスラエル訪問に際してのコール首相の「コール首相の後から生まれてきた者の恩恵」発言(つまり後から生まれ、ナチスと関わっていないド

イツ人には、自分も含めてナチズムの罪に関する責任は無いという意味)はよく知られているし、終戦五十周年(一九八五年)に際してもレーガン米大統領(ボン・サミットのため訪独)とビットブルク軍人墓地訪問を訪問して「歴史」に区切りをつけたという意図が見られた。この後、この軍人墓地にはナチス親衛隊の墓もあることが分かって世論の反発を買ったコール首相は、ベルゲン・ベルゼン強制収容所を同日に訪問することに決定した(一九八五年五月五日)。加害者と被害者を同時に扱うという首相の姿勢は、進歩派や批判的知識人からは「歴史」の修正と受け取られ、猛烈な反発を浴びた<sup>(24)</sup>。

### ③ドイツ連邦議会選挙問題

当時、ドイツ歴史家論争と時を同じくして、ドイツ連邦議会選挙がおこなわれていた。このことは、論争が一層、政治色を帯びることにつながった。そもそもこの論争は、先にも述べたように、「進歩派」対「保守派」の対立という特色を持っており、コール保守政権が関わる歴史博物館問題やビットブルク墓地訪問問題に対して賛否を表明することは、そのまま政治的態度表明ともなり得たのである。したがってノルテがビットブルク墓地訪問問題に関して、アメリカ合衆国のアーリントン軍人墓地を持ち出して比較したことは(後述。HSG 邦訳四三を参照)、そのまま彼の「保守派」としての態度表明となつたし、ハーバーマスがそれを批判したことは(註<sup>(25)</sup>を参照。HSGc 邦訳一九八)、進歩派としての態度表明となつた。既に述べたように、ドイツ歴史家論争において、ヒルグルーバー(HSG22 邦訳一八

二)、シテヘルマー(HSG91 邦訳二二八)、フェスト(HSG89 邦訳二二六)は、ハーバーマスが選挙戦を有利にすすめるという政治的な目的を持つてこの争をけしかけたと批判した。この真相は定かではないが、ドイツでこの政治に関してナチズムを持ち出すことは非常にデリケートな問題を含んでいる。それは刑法に関わる問題であるだけでなく、イエニンガー事件<sup>(26)</sup>を見ても通る。失点をおかせば政治的生命を左右しかねない問題ともなり得る。したがって、もし選挙戦において、すでにドイツでは公的な歴史認識となつているナチズムの罪に対する重大認識を軽減しようと意図していると判断された政治家は、全く不利な状況に追い込まれるわけである。政治的であることを意識すればするほど、この問題は神経質にならざるを得ない問題となつた。

### (b)「ドイツ中欧特異論」

先に引用したハーバーマスの文章中にもあったが、この論争では両陣営共にドイツ連邦共和国の西欧志向を支持していた。無論、こまかく吟味するならば、ハーバーマスとノルテらとの西欧デモクラシー観には違いがあるが、西欧志向という点では一致していたと言える。これもまた、その国家成立に際して歴史的な複雑性を抱えるドイツ(西ドイツ)に特有の現象ではあった。この点、政治的な場面でよく見られるような、原理的な保守派と進歩派の対立関係とは全く異なっている。ハーバーマスが主張した「憲法愛国主義」の見解は、戦後、ギュン

ター・グラスをはじめとする西ドイツ知識人が主張した「ドイツ基本法を守るこそが愛国心である」という主張を想起させるし、それに連なるものであろう。

ドイツが中央ヨーロッパに位置していたことが、ドイツ史の展開に大きな影響を及ぼし、それ故ドイツはイギリス、フランスといった西欧諸国とは違った特別な道を歩み、反文明的な精神が形成されたというドイツ中欧論はこれまでもよく見られた議論であった。ハーバーマス<sup>(20)</sup>やコツカはこのテーゼを拒絶する。一方でシュテュルマーはこのテーゼを肯定しているし、中部ヨーロッパの歴史を描いたヒルグラーバーもまたそうである。

無論、かつての中欧論は「中部ヨーロッパ」をドイツの指導下に糾合しようというものであり、今日ノルテラが唱えているものは、中部ヨーロッパの諸関係が再生されることを目指す考え方ではある。しかし大戦後の現代においてそれは自明のことであり、殊更に取り上げるほどの意見ではないと思われる。今日、ドイツを盟主とした中欧の再編をのぞむものはいないであろうし、それはドイツ歴史家論争が沸き起こった一九八六年の時点でも同じであると思う。東西冷戦まった中の一九八六年に中欧の再編を真剣に憂う者がいたとは思えないからである。この点、ヒルグラーバーの二種類の「中欧論」は的を得ているものとは言えない。この論争において問題となっていたのは、戦中にナチス政権が「中欧」を意識して政策を展開していたかという問題であり、またドイツは中欧に位置するために、西欧とは違った特異な歴史を辿ったのかという問題である。

ここで思い起こされるのは、第一次世界大戦期からワイマル共和国時代に、トーマス・マンをはじめとして多くのドイツ知識人が、「ドイツ中欧特異論」を展開し、ドイツと西欧との差異をクローズアップし、熱狂的にドイツの戦争政策を支持したところである<sup>(21)</sup>。第一次世界大戦後、多くの知識人はその誤りに気づき、西欧への「信仰告白」を遅ればせながらおこない、ワイマル共和国支持に向かうのであるが、それを受け入れられない一部の知識人は反ワイマル勢力となり、それがナチス政権成立への土台をつくったことである。もちろん、時代背景も違いうし、NATO内におけるドイツを主張するシュテュルマーらの見解をこれと同列に論じることが慎まなければならない。しかし、ドイツ人としてのアイデンティティの確立という表現に、当時と同様のナショナルな臭いは感じられる。この「ドイツ中欧特異論」については(c)でもまた多少言及する。

(c)ナチズムの比較可能性の問題—ノルテレーゼの問題点—  
ハーバーマスは、「修正主義者」の見解の中に、ナチズムの歴史を修正したいという意図を読みとり、この論争を仕掛けた。歴史学という装いの中に隠された公的「歴史」の認識という問題をハーバーマスはそこに読みとったからである。そういう側面があったことは事実であると論者も考える。フェストの主張にも関わらず、この論争において主要な問題は、現代ドイツにおけるナチズムの公的な歴史認識の問題であった。ノルテラの陣営は、しばしば「歴史学の分野では」という限定を持ち出し

て、これを専門家だけの話で片づけようとしているが、その割には、記述は一般にもあてはまるものばかりである。また、そもそもノルテが、一般紙に論文を発表したことは、その経緯はいろいろあつたにせよ、一般大衆を讀者として想定していたことを意味している。ノルテは歴史の公的使用の問題について次のように答えているのである。

ナチスの過去を他のすべての過去と同じに、その複雑さにおいて認識し、「客観性」を追求しようとする試みはすべて「弁護論」だという刻印を押されてしまうという状況である。

(HS24 邦訳一七1)

また、先にも引用した「ドイツ連邦共和国の歴史は過ぎ去ろうとしない過去によって特徴づけられている」(HS27 邦訳一七二)という表現は、学問の特定の分野ではなく、一般論としてこの問題を取り扱っていることを示している。また論争の過程の中で、ヒルグラーバーが、歴史学の進展をフォローしていないハーバーマスは、ナチスに関する月並みすなわち古典的なイメージしか抱いていないと述べたことは、翻つてみるならば、その「古典的なイメージ」こそがドイツの公的な歴史認識としてハーバーマスのみならず多くのドイツ国民のイメージなのであるから、その歴史修正主義者が正しいと見なすナチス像を彼らは人口に膾炙したいと考えたとは言えないだろうか。それ故、ノルテは「過ぎ去ろうとしない過去」という論文によつ

て、本当は過ぎ去ってしまったものであるのになぜ未だにそれにこだわっているのかと訴えたのではなかったのだろうか？

この論争の過程でハーバーマスに対してしばしば向けられた「歴史学の専門家でもないのに」という批判に対して、コツカ、エーバーハルト・イエツケル、ハンス・モムゼンらの歴史学者がハーバーマスに近い立場で発言した。コツカは、この論争は歴史学の専門分野の問題を取り扱っているのではないと言明もしている。ハーバーマスの強い語調は、文面からして比較可能性そのものを否定する印象を受けることは事実である。確かにこの論争でハーバーマスはナチズムが何かと比較されることは強く拒絶したが、それ以上のことは述べていない。コツカらはハーバーマスの発言を補い、ナチズムの比較可能性という問題を歴史家として論じた。そして彼らは、比較可能性は歴史学の重要な方法であることを否定しないが、比較の方法が問題であるという結論に達したのである。比較は緊密性のある同質のものとなされるべきもので、また比較においては類似点のみならず相違点も比較されねばならないからのである。

確かにノルテは、ナチズムに対してボルシェビズムとボル・ポトを持ち出してきて、これを「アジア的蛮行」(ein asiatische Tat)と表現し、「なぜナチスがアジア的蛮行に及んだのか？」(HS45 邦訳四六)と問うている。しかしコツカが言うように、比較は本来、伝統的によく比較されてきた社会、すなわちドイツで言うならば西欧社会となされるべきもので (HS34 邦訳一一九)、「アジア的蛮行」と差別的とも受け取れる名称で呼



ぶような社会となされるべきものではないだろう。したがって、むしろ西欧ではデモクラシーの理念が芽生えたのになぜドイツでは芽生えず、ナチズムの政権獲得につながっていったのかという観点からこそ考察されるべきものである。

ここに至って、比較可能性の対象の問題と先に(b)で見てきた「ドイツ中欧特異論」との関係を想起せざるを得ない。つまり、西欧社会とドイツの比較を重視する視点に立てば、「ドイツ中欧特異論」という考え方は生まれてこない。そこでは、なぜドイツは西欧と深い結びつきがあるのに違った歴史展開を辿ったのかという「ドイツ特異論」は生まれてくるかもしれないが、そこでは西欧との結びつきが重要視されているので、「中欧」という概念は必要ない。しかしノルテらのように、「アジア的蛮行」という表現によって、東側との関連を主張するならば、当然文化的社会的にも東側とは異質であるので、東欧あるいは東に帰属したという概念は生まれず、かといって西欧とも違うため「中欧」という概念が生まれる。そしてこの理念が、ナショナリスティックな第一次世界大戦時のドイツ知識人の意識と共通のものであることを思えば、この「中欧」という概念自体に問題があるように思えるのである。

比較方法の問題のみならず他にもノルテの方法にはいくつかの問題点がある。

まずノルテは、ビットブルク軍人墓地問題を取り上げ、「もしも一九五三年の時点で当時のドイツ連邦共和国首相が、アーリントン軍人墓地の無名戦士の墓に詣でるのを拒否し、しかもそ

の際に、そこにはドイツの民間人に対するテロ攻撃に参加した連中も眠っているからだという理由を持ち出したら、どういうことになっていったか」(HS13 邦訳四三)と語った。ノルテは、ナチスが歴史の対象になっていないことに不満を持ち、出版物でナチス親衛隊が、略奪者や暴行者としてのみ描かれることに不満を持っているわけである(HS13 邦訳一〇)。しかし、それをアメリカ合衆国のアーリントン軍事墓地と比較するということは何を意味するのだろうか？単に、外交関係において友好である二カ国が相手国に対して敬意を払わないというそれだけの事実を指しているのか？そしてこれも比較の範疇に入る事柄と言えるのだろうか？ここには両国における歴史も、両国のみならず世界史も何ら特殊な事情というものが介在していない。

またノルテは、ランズマン監督のドキュメンタリー映画『ショアー』を持ち出し、ナチス親衛隊のメンバーも彼らなりに犠牲者であったのかもしれないこと、ポーランド人にも反ユダヤ主義が蔓延していたことを強調した(HS13 邦訳四三)。

『ショアー』はドイツ歴史家論争においてしばしば取り上げられた。このドキュメンタリー映画を通じて、そこから論争において問題になっているナチズムのユダヤ人最終解決問題について再考するという意図からであろう。しかし『ショアー』に関するノルテのこの見解には、首を傾げざるを得ない。ノルテの発言は、この長編ドキュメンタリー映画の本質をあらわしているとは全く言えない。このドキュメンタリー映画は、ユダヤ人虐殺の実態をそれを体験した人の目を通じて、正確に見ようと

したものであった。従来こうしたドキュメンタリーは被害者の体験に主眼がおかれているのだが、ランズマン監督は加害者や、ルビヤンカ強制収容所の周辺住民にもインタビュをおこなった。残酷とも思える執拗な質問が繰り返され、隠し撮りまでもこのドキュメンタリーでは用いられている。虚偽と思われる答えに対しては、インタビュアーは執拗に質問して真実を探り出そうとする。それは虚像ではなく真の現実を描き出したいというランズマン監督の意図からである。ポーランドにおける反ユダヤ主義の蔓延は、この映画の派生的なものに過ぎない。このドキュメンタリーは、加害者のナチス親衛隊と被害者のユダヤ人の心情と体験をこそ描き出そうとしたのである。

結局、ノルテは、なぜナチズムの問題を取り上げる際にユダヤ人虐殺にばかり目が向けられるのかという疑問を抱いているわけである。つまりそれは、学問的にはすでにユダヤ人虐殺は特別視されないものであるはずなのに、一般的にはそればかりが重要視されて考えられているのかという疑問に集約できるのではないだろうか？ また一方で、ノルテにとっては対等な比較こそが重要であるようである<sup>(20)</sup>。そして対等な比較という観点に立つかぎりは、コツカが述べたような比較の質は問われないし、何と比較しても良いわけである。しかしそうした比較のあり方は、歴史認識を含む実際の感覚とはずれるものであるし、この点に大きな問題があると思われる。

#### 四 結 び

外国人がこのドイツ歴史家論争を、あたかもドイツ人であるかのように論争を真正面から取り扱うことには、あまり意味はないかもしれない。例えば、第二次世界大戦でナチスドイツと関わった国ならば、当然のことながら自国の歴史とナチスドイツとの関係からこの論争を見てしまうであろうし、また日本人ならば、しばしば同じ敗戦国としてドイツと比較されるように、「戦争責任と戦中史をどう取り扱うか」という視点を離れられないからである。実際、こうした論争では、「外交での議論の複雑性と極度の多様性」<sup>(21)</sup>を鑑みて、論争そのものを論じる際にはそれを排除することは適切である。したがって、歴史家論争を外国人であるわれわれが取り上げても、それが論争の紹介だけにとどまってしまうことは避けられない。

しかしそれでもなおドイツ歴史家論争に多くの関心が示されているのは、この論争から学ぶべきものが多いからである。まず論者個人の関心からではあるがそのいくつか挙げてみると、過去の自国史を公的にどのように取り扱うかという問題、また歴史はそもそも、ハーバーマスの見解のように「道徳化」されて見るべきなのかという問題を即座に述べることが出来る。

過去の歴史の公的な歴史認識の問題は、外交政策と同じようなもので、どの政党が政治のインシアティブを握るかによって左右される。それは既に一九八二年以降、保守陣営から持ち出された歴史政策を見ての通りである。しかし大体は、穏健なも

のにおろることが多い。歴史は積み重ねられた年月があるからこそ「歴史」なのであって、これまでの見解が政権が変わったからと言って、突然覆されることはそうないからである。したがって、ホルテらの見解が、公的な見解となりはしないであろう。

歴史は「道德化」されるべきなのかどうかという問題について。ハーバーマスは、ナチズムの歴史を反省し、そこからこのようなことを再び繰り返さないという教訓を引き出すべきだと言う。そのためには一九四五年でドイツ史は断絶したと見るべきであると彼は主張する。これは歴史の「道德化」である。一方、歴史のない国においては何が起こるか分からないと主張するシュテュルマーは、歴史の断絶を拒絶する。両陣営の見解には、それぞれの言い分があつて、この論争が、完全に決着がつかずまた決着がつくことのない問題を取り扱っているのだという感を抱くのみである。ここで問題とされているのは、ドイツ史におけるナチズムの位置である。ナチズムは、ドイツにおいて「特別なもの」として取り扱われてきた。それは公的な歴史認識においてのみならず法律や憲法においてもそうであつた。今日でも、ナチスの犯罪に関与したものは時効が適用されず、ナチスの行動は取り締まりの対象である。ドイツの教育の現場では、ナチスについてかなりの時間を割いて教えている。少なくともナチスの「歴史」については完全に「道德化」されている。他の歴史についても、その歴史から学び「道德化」されるべきなのかどうかについては別として、ナチスの歴史に限って言えば公的には完全に「道德化」されて考えられている

と見るべきである。人権思想や絶対主義打倒の理念としての「デモクラシー」が、多くの国で「道德化」されて教えられているのと同様の意味を、ドイツにおけるナチズムの歴史の位置づけは持っていると言えるであろう。これは公的な歴史認識として受け継がれて行くことであろうし、それはドイツ歴史家論争後のドイツの状況が既に証明しているのである。

## 註

ドイツ歴史家論争における各論者の引用で、引用の後に括弧付きで頁数を示しているものは、前半の頁数が、《Historikerstreit》Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung, R. Piper GmbH & Co. KG, 1987. (ドイツ歴史家論争に参加した二七名の知識人の見解を集めたもの)であり、後半の頁数が、抄訳「過ぎ去ろうとしない過去—ナチズムとドイツ歴史家論争—」徳永恂・清水多吉・三島憲一訳、人文書院、一九九五年、からのものである。これ以外の書物からの引用は別途に註で示した。翻訳に際しては、基本的に既存の日本語訳にしたがったが、一部手を加えた。

(1) ドイツ歴史家論争をめぐることは、日本でもすでにさまざまな論文が発表されている。その主要なものをここに挙げる。

永井清彦「ヴァイツゼッカー演説に逆風つる」『世界』

(岩波書店) 第五〇三号、一九八七年。佐藤健生「ドイツ近現代史の「特殊な道」考」『「拓殖大学」研究年報』第一三号、一九八七年。佐藤健生「ナチズムの特異性と比較可能性―西ドイツの「歴史家論争」―」『思想』(岩波書店) 第七五八号、一九八七年。末川清「西ドイツ歴史学の最近の傾向―「歴史家論争」の周辺―」『立命館文学』五〇四号、一九八七年。望田幸男「二つの近代―ドイツと日本はどう違うか」朝日新聞社(朝日選書)、一九八八年。大石紀一郎「西ドイツにおける政治文化と歴史意識の現在―「歴史家論争」の問題と背景」『教養学科紀要(東京大学教養学部)』第二〇号、一九八八年。後藤俊明「西ドイツにおける歴史意識とナチズム相対化論」『商学部論叢(愛知学院大学)』第三三卷第一号、一九八八年。清水正義・芝野由和・松本彰「西ドイツにおける「ナチズム」後の政治と歴史意識」藤原彰・荒井信一編『現代史における戦争責任』青木書店、一九九〇年、所収。三島憲一『戦後ドイツ―その知的歴史―』岩波書店(岩波新書)、一九九一年。佐藤健生「遠ざかる「過去」をめぐる―「歴史家論争」後のドイツ」『岩波書店』『思想』第八三三三号、一九九三年。三島憲一編『戦後ドイツを生き延びて―知識人は語る』岩波書店、一九九四年。

(2) 更に一九八五年には、刑法一九四条が制定され、ナチスの犯罪を否定する発言は、犠牲者への侮辱であるとい

う理由で処罰の対象になった。

(3) ドイツの歴史教科書を取り扱ったものとしては、例えば藤沢法映『ドイツ人の歴史意識―教科書にみる戦争責任論』亜紀書房、一九八六年、などを参照のこと。

(4) ここで主な論者として取り上げた六人の中、コッカを除く五人は、先に挙げたビーバー社出版の『Historikerstreit』(Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung. の最終部(二八一頁以下))で、本の出版するに際して、改めて歴史家論争に関するコメントを依頼された人々である。この五つのコメントを収録するに際しては、利害関係の絡んださまざまな論議があったようであるが、その点に関しては日本語版抄訳の二三四頁以下を参照していただきたい。この五人だけでは、どうしても「ハーバーマス一人対他の四人の歴史修正主義者」という構図があまりにもはつきりしてしまうので、ハーバーマスに近い立場に立つ論者であり、且つこの歴史家論争を重要な論争として位置づけ、その後も発言を続けているユルゲン・コッカをここで取り上げることにした。

(5) Jürgen Habermas: Eine Art Schadensabwicklung, (Kleine politische Schriften, Bd. 6), Suhrkamp (Frankfurt am Main), S. 162, 1987.

邦訳は、ユルゲン・ハーバーマス「歴史意識とポスト・伝統的アイデンティティ―ドイツ連邦共和国の西欧志

向「河上倫逸編『ゲルマニスティックの最前線』(歴史と社会第十四号)所収、リプロボート、一九九三年、二一八頁。

(6) *ibid.*, S.163. 邦訳二二九頁以下。

(7) *ibid.*, S.168. 邦訳三三五頁。

(8) *ibid.*, S.173ff. 邦訳二四一頁。

(9) この論文は『*Historikerstreit*』に収録されている。出版元のビーバー社はこの論文に関して註をつけており、それによるとこの論文はノルテが一九八〇年にシユンヘンのカール・フリードリッヒ・ジーマンス財団で行った講演に基づいており、それを縮小して一九八〇年七月二十四日付の『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に掲載したという。このことに関しては、HS39. 邦訳三三三を参照のこと。

(10) この学問に関して、ノルテは「西側の学問にとって」という限定をつけている。

(11) ハーバーマスの両歴史博物館に対する見解については、HS72. 邦訳六四以下を参照のこと。

(12) Michael Stürmer: *Das ruhelose Reich. Deutschland 1866-1918*, Siedler (Berlin), 1990. この書物は、Siedler社から出版されている *Die Deutschen und ihre Nation: Das Reich und die Deutschen*, 二二巻からなるシリーズの第三巻にあたる。

(13) cf. Michael Stürmer, Hartmut Boockmann, Heinz Schilling,

Hagen Schulze: *Mitten in Europa*, Siedler (Berlin), 1992.

(14) フェストの著作は数多いが、そのいくつかをあげる。

Joachim Fest: *Hitler. Biographie, Propyläen* (Berlin), 1995

(Neuausg.). Joachim Fest: *Staatsreich. Der lange Wege zum*

*20. Juli*, Siedler (Berlin), 1994.

(15) この点に関してフェストは、ハーバーマスの他に、イエッケル、ハンス・モムゼンを実名であげている(HS389. 邦訳二二六)。

(16) この箇所に関しては、HS389. 邦訳二二六を参照のこと。

(17) ヒルグラーバー一九八九年に他界している。著書は数多い。Andreas Hillgruber: *Der Zweite Weltkrieg 1939-1945. Kriegsziele und Strategie der großen Mächte*, hrsg. v. Bernarg Martin, Kohlhammer (Stuttgart), 1996 (erw. Aufl.). Andreas Hillgruber: *Der Zweite Weltkrieg 1939-1945. Die "deutsche Frage" in der Weltpolitik*, Kohlhammer (Stuttgart), 1995 (8.Aufl.).

(18) Andreas Hillgruber: *Zweierlei Untergang. Die Zerschlagung des Deutschen Reiches und das Ende des europäischen Judentums*, Siedler (Berlin), 1986.

(19) しかし同時にシユティルマーは歴史博物館が、歴史学研究の成果を土台にしてそれを来館者に見せ、自国の歴史を位置づけると言う意味で有益であることも主張している。HS237. 邦訳一八八を参照のこと。

(20) Jürgen Kocka: *Geschichte und Aufklärung—Aufsätze—*,

Vandenhook & Ruprecht (Göttingen), 1989. 肥前栄一・杉原達訳『歴史と啓蒙』未来社、一九九四年。

(21) このあたりの事情に関しては、イッガース『戦後ドイツの歴史意識と歴史学』、『思想』八四八号、岩波書店、一九九五年。ハンス・モムゼン、ウォルフガング・モムゼンもこの学派。なおイッガースは、歴史家論争を一大政治論争と位置づけている。

(22) ハーバーマス前掲論文二五五頁。

(23) ハーバーマスは「歴史の公的使用について」の中で、ビッドブルク批判をおこなっている (HS245. 邦訳一九八)。(ハーバーマスは、午前中はベルゲン・ベルゼンの強制収容所を訪問し、午後はビッドブルクに行くというのは、ナチスの犯罪の特異性を打ち消すものに過ぎないと批判し、また軍人墓地を訪問するのはドイツ人のナショナルな歴史意識を覚醒しようとするものであると批判した。)(24) 一九八八年十一月にドイツ連邦議会議長イエニンガーが、ナチズムの犯罪を軽減する発言をしたとして辞職に追い込まれた事件。

(25) ハーバーマス前掲論文二二八頁。

(26) Thomas Mann: *Betrachtung eines Unpolitischen*, Fischer-Taschenbuch-Verlag (Frankfurt am Main), 1983. その他全集版など版多数。

(27) この点に関しては、HS41ff. 邦訳四二頁以下を参照。

(28) ピーバー社もこのことについて言及している (邦訳二

三六を参照のこと)。これは英語版のあとがきに掲載されているもので、オリジナルのドイツ語版には掲載されていない。

(しばたいくこ 木更津工業高等専門学校人文系専任講師)